慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ・ ベルリン州におけるバイリンガル教育
Sub Title	Bilingual education in Berlin
Author	平高, 史也(Hirataka, Fumiya)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.14, (2017.) ,p.81- 91
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20170000-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ・ベルリン州におけるバイリンガル教育[1)]

平　高　史　也

1．はじめに

一般にバイリンガル教育とは、母語および母語以外の言語の２言語で言語以外の教科を教えることを指す。ドイツ語圏ではふつう bilingualer Unterricht と呼ばれるが、教科教育と外国語教育（および異文化間教育）の両面を含むため、ヨーロッパでよく使われている CLIL（Content and Language Integrated Learning）という総称のもとにまとめられることもある。Barkowski & Krumm（Hrsg.）（2010）によれば、ドイツ語圏ではギムナジウムの７年生（日本の中学１年生）から地理、歴史、政治などの社会科学系の科目を母語以外の言語で教えるのが一般的で、小学校ではまれである。母語以外の言語では英語、次いでフランス語が最も多く、少数ながらオランダ語、スペイン語、イタリア語、トルコ語などがある。国境地域ではフランス語やポーランド語、少数言語ではデンマーク語、ソルブ語があるという。その他、特殊な例としてドイツ語を母語とする生徒とドイツ語以外の言語を母語とする生徒が半数ずつ在籍するクラスに２言語で全教科を教えるベルリン・ヨーロッパ学校[2)]がある。

2．ベルリン州の学校における外国語教育

ベルリン州の学校に通う児童生徒は、およそ以下のようなルールに従って、外国語を学習していく。

1）第１外国語：小学校３年から英語（またはフランス語）が必修。
2）第２外国語：選択必修。中学校１年（または３年）から、小学校３年でフランス語を履修した生徒は英語を、英語を履修した生徒は何らかの言語を履修。
3）第３外国語以上：中学校３年以降選択。

外国語教育は学校のタイプによって、次のように扱われている。外国語がカリキュラムに占める割合が少ない順に列挙する。

1）一般の公立学校：外国語を１つ（以上）履修。
2）バイリンガル学校：一部の教科（科目）を英語、フランス語、スペイン語で学ぶクラスのある学校。CLIL 方式。
3）ヨーロッパ学校：ドイツ語とパートナー言語（英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ギリシャ語、ロシア語、トルコ語、ポーランド語）で全教科を半分ずつ学ぶクラスのある学校。イマージョン方式。
4）私立学校（ミッション系学校等）：小学校５年からドイツ語、英語、ラテン語を、中学校１年でフランス語か古典語、ギリシャ語、中学校３年で第３外国語として中国語、日本語などを学習。

このうち、本稿で扱う２）のバイリンガル学校には、外国語を教科として教えるだけではなく、授業言語としても用いて他の教科（たとえば、地理、化学など）を教えるクラスが設置されている。つまり CLIL のクラスのある学校ということになる。ベルリンでは、このタイプの学校のうち最も多い言語の組み合わせはドイツ語・英語で約60校、次いでドイツ語・フランス語が約10校、そしてドイツ語・スペイン語が３校となっている。この３校のうちベルリン・ヨーロッパ学校を除く２校の公立学校を2016年２月に訪問する機会を得た。

３．バイリンガル教育の実施規則から

ベルリン州の教育省にはバイリンガル教育の実施規則[3)]がある。ここでは、2016年12月15日に改正された規則から主なポイントを掲げる。

1）バイリンガル教育：言語以外の教科を外国語で教えること。準備として、当該外国語とその外国語で教える科目の授業を、中学校１年、２年で最低１時間追加しなくてはならない。この授業は外国語ではなく、教科の授業として実施する（CLIL 方式）。
2）目的：異文化間コミュニケーション能力と外国語コミュニケーション能力の向上。
3）バイリンガル学校特有のプログラム：交換留学、姉妹校提携、見学旅行など、当該外国語が公用語になっている国・地域（の生徒）との交流。
4）バイリンガル教育で使われる外国語：遅くとも中学校１年から開始。
5）バイリンガル教育の開講：中学校１年。遅くとも中学校３年までには１科目を開始。小学校では開講できない。
6）バイリンガルクラスの開設（継続）：十分な申込者（約20名）が必要。
7）履修：生徒と保護者の了解が前提。途中でやめる場合も最低２年は履修しなければならない。

８）どの学年でも全授業の少なくとも半分はドイツ語で指導する。

９）バイリンガル科目でも、必要なら特に専門用語の定着のためには部分的にドイツ語を使用してよい。

10）高校卒業試験の試験問題は次のいずれかを採用。

・州の統一試験：学校が任命する教員３名が当該外国語に翻訳。

・学校独自の試験：当該外国語版とそのドイツ語版を提出して審査を受ける。

11）評価のポイント：教科内容とその専門用語（であって、外国語ではない）。

12）通信簿：履修した科目と教授言語を記載。通信簿には「生徒Ａは、教科Ｘの言語Ｙで授業が行われた単元Ｚを履修した。」というように記される。

13）２言語サーティフィケート：２年以上バイリンガルクラスを履修した生徒に通信簿に添付。

14）バイリンガルクラスの教員の言語能力：当該外国語の CEFR の C2 レベル。中学校１年から中学校３年の授業の担当教員は C1 レベル。バイリンガル授業を実施する教科には、上記の条件を満たす教員が少なくとも２名在籍していなくてはならない。

CLIL 方式のバイリンガル授業はあくまでも教科の授業であって、外国語のそれではない。英語以外の第２外国語の場合、中学校１年から学習を始めた外国語を授業言語としてわずか２年後の中学校３年で特定の教科を学び始めることになる。これは生徒にとってはかなりハードルが高いことが推測できる。そこで、周到な準備が必要となるため、１）に記されているように、当該の外国語と教科の授業を中学校１年から増強しなくてはならない。また、２）では異文化間コミュニケーション能力の方が外国語コミュニケーション能力よりも先に言及されていることに注目したい。つまり、外国語によってコミュニケーションをとるのも大切だが、外国語・文化を身につけて、異文化との出会いの機会を提供したり、それに対する気づきを育てたりしようとしているのだろう。大半の生徒の母語であるドイツ語の重要性も見逃していないことは８）、９）に示されている。

４．Willi-Graf-Gymnasium（ヴィリー・グラーフ・ギムナジウム）のバイリンガル教育

訪問した２校のうち Willi-Graf-Gymnasium では教員３名の話を聞き、２名の授業（１名が45分、もう１名が90分）を参観する機会を得た。同校は教員48名、生徒538名の学校で、ベルリン市の南部に位置する。1990年頃までは第２外国語としてはフランス語が人気があったが、その後スペイン語の履修者が次第に増え、スペイン語ブームと言えるほどになったという。ドイツ語・スペイン語のバイリンガルクラスは2003/04年に中学校１年に導入された。同校では第１外国語は全員英語を履修するが、ドイツ語・英語のバイリンガルクラスはない。第２外国

語としてのスペイン語は中学校１年次から履修でき、次の３クラスが設けられている。以前は7b、7c の履修者が多かったという。

7a：バイリンガルクラス：スペイン語７時間／週（うち３時間は小クラス授業）
7b：文学系クラス：スペイン語４時間／週
7c：自然科学系クラス：スペイン語４時間／週

中学校１年から高校３年までのスペイン語の授業時間数は表１の通りである。

表１：Willi-Graf-Gymnasium のスペイン語の授業時間数

	バイリンガルクラス（7a）	第２外国語としてのスペイン語（7b、7c）
中１	７（うち３は少人数クラス）	４（うち１は少人数クラス）
中２	７（うち３は少人数クラス）	４（うち１は少人数クラス）
中３	４＋３（地理）	３
高１	４＋１（スペイン語上級）＋２（地理）＋３（歴史）	３
高２	５＋３（政治）	３
高３	５＋３（政治）	３

１クラスは約30名で、原則としてゼロビギナーが対象だが、母語話者が数名含まれている。バイリンガルクラスではクラスを少人数にして授業の効果を上げるために、一部の授業でクラスを２つに分割して実施している。すなわち、クラスの一方の15名がスペイン語の授業を受けているときに、他の15名はたとえば化学の授業を受けていて、次の時間にそれを逆にするという方式である。高２、高３のスペイン語はいわゆる Leistungskurs（強化コース）で移民、ヨーロッパ、若者の失業などのテーマを扱う。

中学校１年で生徒が上記３つのうちのどのクラスに入るかに関しては保護者の判断が大きいという。バイリンガルクラスに Abitur（高校卒業試験）まで残るのは中学校１年で始めたときの生徒のうち半数以下で、親の意向で始めた生徒はやめるケースが多い。学校は生徒がやめるのも認めており、強制しないので減ってしまうという。ゼロビギナーの半数は高校１年でやめるが、一方コスタリカに留学した者もいた。バイリンガルクラスの履修者は高１修了時点で B1 に達していなくてはならないが、他の２クラスの生徒もこの時点までで B1 には達すると

いう。母語話者にはB2、C1まで到達する者が多い。高校卒業試験の修了証は２言語で発行され、バイリンガルクラスを履修したことが明記される。バイリンガルクラスの生徒には卒業後、スペイン語を活かす者も多く、進路はホテル業、教職（スペイン語教員）、エラスムスによる留学、マスコミなどであるという。

インタビューに応じてくださったスペイン語教員のA氏はチリのドイツ学校で教授経験がある。高校２年生に対するスペイン語による政治の授業を担当しているが、政治は専門用語も少なく、それほど難しいとは思わないということであった。生徒はスペイン語で習った語彙は６週間で忘れるが、またドイツ語で習えば蘇ってくる。スペイン語で学習するのは大変ではあるが、その学習過程を経験しているので、問題はない。つまり、言語の問題はあるが、思考の問題はないという。また、ビジュアル教材や図表などを活用するので言葉は忘れても概念は残るという。暗記式の学習は話せるようにはなるが、概念は残らないということであった。バイリンガル授業の教材はほとんど自作で、インターネットがなければできなかったと語っていた。しかし、これには別の理由もある。ベルリンの公立学校なので、当然ベルリン州の指導要領に従わなくてはならない。つまり、スペインやチリなど他国の教材は使えないのである。これはバイリンガル学校でよく聞く話である。

５．Willi-Graf-Gymnasium（ヴィリー・グラーフ・ギムナジウム）での授業参観

同校では中学校３年生の地理と高校２年生の政治の授業を参観した。

中学校３年生の地理はスペイン語母語話者のB教諭による45分の授業であった。B教諭は2014年から同校に勤務しておられる。授業中はほとんどスペイン語で、一部ドイツ語を使っていた。クラスは25名で、両親が南米出身の母語話者もいるので、グループワークでは母語話者と非母語話者を混ぜるようにしている。教室は正面にスクリーンとホワイトボードがあり、机は正面のホワイトボードに向かって並んでいる通常の配列であった。教材は２ページのリーディングテキストで、サハラ砂漠の南に広がるサヘル地域の地理、動植物、気候、砂漠化などについて書かれたものが使われていた。授業のおよその経過は表２のとおりである。教師と生徒のやりとりはほぼスペイン語で行われ、理解できない生徒にはB教諭がときどきドイツ語で説明していた。テーマによって分けられたグループは、ドイツ人が大半のグループ、母語話者の話を他の３～５名が一生懸命聞いているグループなど、さまざまであった。グループワークではかなりドイツ語が聞こえたが、机間巡視をしているB教諭が近づいてくると、スペイン語に切り替えるようであった。授業後のB教諭の話によれば、グループ分けは毎週異なるようにしているとのことであった。

表２：スペイン語による中学校３年生の地理の授業

時刻	内　　容
8：50	授業開始。S１名が地図帳を全員に配布。T プリント配布、PC 起動。ペアワーク：地図帳を見ながら、プリントの地図（前方のスクリーンに投影）に記入。スペイン語が聞こえるが、ドイツ語での説明もあり。T 前方のスクリーンでときどきワークの説明。
8：58	T２枚目のプリント配布。
8：59	T と S でスペイン語による Q＆A。国名を７つ答えさせる。発音の説明。
9：03	グループワーク：テーマ（サヘル地域の気候、地理など）ごとに４～６名からなる５つのグループを作る。どのグループにも母語話者がいる。グループワークの結果は翌週の授業で発表させる。T２言語対照のキーワード・リストを配布、これに関するテストを翌週実施することを伝える。
9：11	T 机間巡視。T と S の間でスペイン語によるやりとり。説明を聞いた S がグループの他の S にドイツ語で説明。
9：22	グループの発表。S１名が前に出てプレゼン、もう１名がスクリーンに要点を板書。続いてもう１グループの発表。
9：28	第１グループの S から質問。T が回答。続いて、動植物、気候を扱ったグループが各々発表と板書。
9：35	授業終了。

高校２年生の政治の授業は、前述の A 教諭による45分２コマの授業で、途中に昼休みをはさんで行われた。A 教諭はほとんどスペイン語を話しておられた。本来は９名のクラスだそうだが、当日は最初は６名、２コマ目は７名が出席していた。中学校３年生の教室と同じく、正面にスクリーン（SMART）とホワイトボードがあり、座席・机は通常の前向きの配列であった。参観した授業のテーマは若者をアルコールから守るための法案を作成し、ドイツ連邦議会に上程するというものであった。連邦議会は前の週に見学したという。配布済みのプリントを教材とした授業のおよその経過は表３のとおりである。

授業の冒頭10分ほどは教師と生徒の間の質疑応答で進行した。やり取りはほぼ全部スペイン語であった。全体にかなり私語が多く、生徒どうしはときどきドイツ語で話していた。グループで法案を書くのが課題で、グループワークは A 教諭が近づいてくるとスペイン語になるが、離れるとドイツ語になるようであった。しかし、両言語の切り換えはスムーズに行われている

印象を受けた。生徒がスペイン語で議論しているときは、たとえ問題があってもA教諭は介入しなかった。生徒が書いたメモを提出し、A教諭がそれをパソコンに打ち込むと、SMARTの画面に表示される。

表３：スペイン語による高校２年生の政治の授業

時刻	内　　容
11：35	授業開始。TとSのやりとりほとんどスペイン語。Sどうしはときどきドイツ語。
11：45	Tスクリーンにテキストを投影。Sそれを見て法案作成の準備。
11：55	ペアワーク：先週の連邦議会の見学を思い出しながら２人で学習。プリントの次の課題。
12：00	“Ausschuss”に当たるスペイン語が出ずTとSでやりとり。概念の確認も含む。２週間前にテキストと単語リストを配布したのに忘れているという。
12：11	プリントの課題についてT説明。３人ずつのグループワーク。ここでもTが近づくと、スペイン語に変わる。
12：20	昼休み。２名は食事をしながら単語の学習。４名は外へ。
12：50	再開。３、４人のグループワーク。法案を書く練習。Sどうしが議論しているときはTは介入せず、問題箇所は授業の最後で扱う。
13：16	SのメモをTがPCに入力し、スクリーンに投影。
13：21	S１名が提案１を読んで説明。別のグループのSが提案２を読んで説明。その後、２グループの間でディベートに近いディスカッション。ほとんどのSが発言。
13：30	ディスカッション終了。T補足説明。Sの意見発表もあり。
13：35	授業終了。

６．Friedrich-Engels-Gymnasium（フリードリッヒ・エンゲルス・ギムナジウム）のバイリンガル教育

Friedrich-Engels-Gymnasiumはベルリン市の北部に位置するギムナジウムである。言語とスポーツに力を入れており、教員83名、生徒995名が在籍している。同校では授業参観はできなかったが、C校長にインタビューすることができた。同校ではスペイン語の授業を５年生から取り入れている。スペイン語とのバイリンガルクラスの授業時間数および高校卒業試験でのスペイン語による試験は表４のようになっている。

表４：Friedrich-Engels-Gymnasium のスペイン語の授業時間数

小５	６
小６	６
中１	５
中２	５＋３（歴史の一部）
中３	３＋３（歴史）＋３（地理の一部）
高１	３＋３（歴史）＋２（地理の一部）
高２	５＋４（政治か歴史か地理）
高３	５＋４（政治か歴史か地理）
高校卒業試験	スペイン語：筆記 政治か歴史か地理：筆記または口頭

C 校長の話では、同校では中学校２年に歴史、３年に地理をスペイン語で履修するバイリンガルクラスを設置している。さらに、高校２年からはこれら２科目に加えて政治もスペイン語で履修できる。そして、政治、地理、歴史の３科目からいずれか１科目を選択して、高校卒業試験の１科目とするという。つまり、高校卒業試験の５科目[4)]のうち、外国語としてのスペイン語と政治／歴史／地理の２科目はスペイン語で受験することになる。バイリンガルクラスは１クラス約25名で、現在高校２年生が20名、３年生が24名在籍している。人数が少ないのは、バイリンガルクラスの生徒は概して外国語だけではなく、他の科目の成績も良いので、他のコースに移りやすいからだそうである。また、やはり専門はドイツ語で学びたいと考える生徒もいる。優秀な生徒はゼロビギナーでも C1 まで到達するという。

興味深いのは、前述の Willi-Graf-Gymnasium とは異なり、大学でスペイン語を学ばない卒業生がかなりいるという話であった。南アメリカで社会活動に従事しているケースもあるが、むしろスペイン語にとらわれずにいろいろな分野で活躍している卒業生が多い。つまり、バイリンガルクラスの卒業生はスペイン語圏の言語能力を高めたり、社会や文化にさらなるかかわりを求めるよりは、異文化に対して開かれているという能力を活かしているのだという。

バイリンガルクラスの今後について、C 校長は次の２つの方向を予測していた。一つはバイリンガルクラスの存続が難しいという見方である。これには、社会がますます成果主義になり、持続性が求められないこと、数年前にドイツで中等教育が１年短くなって12年制になり、高校卒業試験が厳しくなったことなどの背景がある。これは、C 校長自身の子が同校のバイリンガルクラスに通っていた７年前にはなかった傾向だという。もう一つは、エリート校は今

後一層バイリンガルクラスを増やすだろうという予測である。複数の言語に高い能力を有していれば、就職などで有利であろうという理由であった。

7．まとめと考察

ベルリン州教育省の担当者D氏の話では、ベルリン州全体としては1990年までアメリカ、イギリス、フランス、ロシアに管理されていたという歴史的な背景もあって、多言語多文化教育を進めるうえでは、有利な土壌があるという。例えば、両親の母語が異なる子どもが少なくないこと、ドイツ語以外の言語を母語とする人材を登用しやすいことなどである。世界のさまざまな情勢を反映してバイリンガル教育のもう一方の言語は英語やフランス語とする学校が圧倒的に多い。しかし、わずか２校でもベルリンではスペイン語のバイリンガル授業が行われている。いずれの学校でも高校３年間ではスペイン語による授業が８～10時間も提供されている。この授業時間数は日本との比較ばかりでなく、ドイツの一般的な学校の外国語科目のそれと比べても、かなり多い。

本稿で紹介した２校は外国語教育に力を入れているが、ベルリンの学校ではプロフィールという考え方を大切にしている。つまり、学校として特色のある教育を進めるということである。外国語だけではなく、芸術系の科目やスポーツに力を入れて特色を打ち出している学校もある。教育に対するこうした見方が、バイリンガル教育の導入を容易にしていると言えるだろう。ギムナジウムでは高校１年生まではクラスがあるが、２年生、３年生にはクラスはなく、生徒は高校卒業試験の準備を兼ねて、自分の関心がある科目だけを重点的に学習する。とかく均質な教育を目指すことに重点が置かれている日本の学校教育とは異なる行き方である。

授業を参観して興味深く感じた点がいくつかある。まず母語話者の存在である。参観したクラスには、両親の一方が南アメリカ出身で２言語で育ったスペイン語を母語とする生徒と、ドイツ語を母語としてスペイン語を外国語として学習した生徒の両者が混在していた。特に中学校１年の時点では、両者のスペイン語能力にはかなりの差があるものと思われる。それでも両者の混合クラスを作るということは、スペイン語を母語とする生徒がいわば教師役となってスペイン語を外国語として学んでいる生徒に教えながら学習を進めることの効果を織り込んでいるのであろう。実際、グループワークの最中には、スペイン語を母語とする生徒の話を他の生徒が聞いているようなグループも見られた。

次に、授業参観では直接はうかがい知ることはできなかったが、教師の負担がかなり大きいのではないかということである。授業の準備や教材開発にはかなり時間も労力もかかっているであろうことが想像できる。A教諭はインターネットがなければ、教材開発はできなかったと言っていた。上述のように、ベルリン州での教育であるから、スペインや南米諸国の教材を使うことはできないから、教材は自分で作るしかない。最初は相当時間もかかったのではなかろ

うか。

興味深いのは、訪問した２校でバイリンガル授業を受けた生徒の卒業後の進路に関する発言が異なった点である。すなわち、Willi-Graf-Gymnasium では何らかの形でスペイン語と関わっている卒業生が多いという答えが返ってきたが、Friedrich-Engels-Gymnasium の校長の話では、むしろスペイン語を学ばない卒業生がかなりいるということであった。前者では授業参観をしており、後者は校長先生の話を聞いただけなので同列に並べて論じることはできないが、おそらく前者はスペイン語のコミュニケーション能力を相当程度伸ばせているという自負があり、後者はどちらかというと、スペイン語学習を通して異文化間コミュニケーション能力を育てているという思いがあるのであろう。いずれにしても、３.で掲げたバイリンガル教育の目的には「異文化間コミュニケーション能力と外国語コミュニケーション能力の向上」の両面が謳われているから、両校の見解はこの目的に適っていると言えるだろう。

この点は「バイリンガル」というと、とかく２つの言語の能力が母語話者並みに優れているという点にばかり焦点が当てられ、それ以外の効果や影響には目を閉じがちな日本の教育では、もう少し顧みてもよいのではないかと思う。スペイン語で授業を受けたら、スペイン語の能力を高めるのも大切だが、それと同時に、あるいは、それ以上に大事なのが異文化に対するまなざしを育て、異なるものに対する寛容性を育むことである。それこそが複言語複文化主義に根差した教育であり、人としての成長に必要な力を育てることになるのではなかろうか。上述のベルリン州のバイリンガル教育の目的の２）で「異文化間コミュニケーション能力」の向上が最初に挙げられているのも故なきことではなかろう。

＊本調査でご協力いただきましたヴィリー・グラーフ・ギムナジウムのＡ教諭、Ｂ教諭、フリードリッヒ・エンゲルス・ギムナジウムのＣ校長、ベルリン州教育省のＤ氏に感謝申し上げます。

注

1）本研究は日本学術振興会科学研究費補助金「一貫教育における複言語能力養成のための人材育成・教材開発の研究」（2015年度～2018年度、基盤研究（A）、研究課題番号：15H01886、研究代表者：境一三）の成果の一部である。本稿は同科研費公開シンポジウム「初中等教育における外国語教育の役割と課題」（2017年３月11日、慶應義塾大学日吉キャンパス）において「ベルリンのバイリンガル教育で見聞きしたこと」と題して行った報告に加筆したものである。

2）ベルリン・ヨーロッパ学校に関する日本語による報告には安井（2003）、Schumacher（2014）などがある。

3）Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Wissenschaft, Berlin（o. J. b）

4）ベルリン州では高校卒業試験は重点科目２、筆記試験科目１、口頭試験科目１、プレゼンテーション科目１の合計５科目から成る。バイリンガルクラスで学習してきた生徒の場合は、例えば、次の５科目になる。１．スペイン語、２．選択科目（例：地理）：スペイン語で受験可、３．数学（筆記）、４．音楽（口頭）、５．プレゼンテーション：１.～４.以外の科目。スペイン語でも受験可。生徒によってこのうち２、３科目をスペイン語で受験することになる。

参考文献・サイト（最終閲覧日2017年11月１日）

Barkowski, Hans & Krumm, Hans-Jürgen（Hrsg.）（2010）Fachlexikon Deutsch als Fremd- und Zweitsprache. Tübingen und Basel: A. Francke Verlag.

Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Wissenschaft, Berlin（o. J. a）: Auf Kurs zum Abitur. Wegweiser für die gymnasiale Oberstufe. Schuljahr 2016/2017.

Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Wissenschaft, Berlin（o. J. b）: Ausführungsvorschriften für bilingualen Unterricht an allgemein bildenden Schulen（AV bilingualer Unterricht）. Vom 9. März 2015（ABI. S. 449）, geändert am 15. Dezember 2016（ABI. S.3735）

Schumacher, Birgit（2014）「州立ベルリン・ヨーロッパ学校（SESB）」西出佳詩子訳、吉島茂・Stephen Ryan 編『外国語教育Ⅴ　一般教育における外国語教育の役割と課題』169−187、朝日出版社

安井綾（2003）「言語教育を中心とする国際化教育政策の提案―ベルリン・ヨーロッパ学校をモデルとして―」『ドイツ語教育』８、18−34、日本独文学会ドイツ語教育部会

Friedrich-Engels-Gymnasium, Berlin〈http://www.feg.cidsnet.de/Neu/Joomla/〉

Willi-Graf-Gymnasium, Berlin〈https://willi-graf-gymnasium.de/〉